

大善寺玉垂宮の鬼夜

久留米大学留学生別科

けやき組 223BA06

楊佳琳

1. はじめに

私は2020年11月に日本に来て以来、日本のお祭りに興味を深く持っている。今年7月に博多祇園山笠を見に行ったら、博多祇園山笠は博多を代表とする祭りで、日本の伝統文化の祭りに私は衝撃を受けた。山笠は夏に行われるが、正月にはどんなお祭りがあるのか気になったので、調べてみると、久留米市にも大きな祭りがあることがわかった。その祭りは「大善寺玉垂宮鬼夜」で1600年以上の歴史がある祭りだ。以前非常に大きな火が燃えている祭りの写真を見て、とても驚いた。そこで、日本の三大火祭りの一つ「大善寺玉垂宮の鬼夜」、特に氏子の役割などについてレポートを書いてみたいと思い、これを選んだ。

2. 背景

「大善寺玉垂宮」のホームページによると、日本三大火祭りの一つである鬼夜が行われる玉垂宮は福岡県久留米市大善寺に位置し、玉垂命、八幡大神、住吉大神が祀られている。大善寺玉垂宮は西鉄久留米駅から電車で西鉄天神大牟田線「大善寺駅」で下車し、徒歩5分だ。入場料は無料だ。有料の観覧席は250席あり、料金は2000円である。開催時間は毎年大晦日から正月7日までで、その間、神事が行われる。神官が齋戒（さいかい）沐浴して燧石（ひうちいし）でとった鬼火を護り天下泰平、五穀豊穰、家内安全、災難消除を祈願する神事を鬼会といい、その結願の行事が七日の追儺祭であるという。鬼夜は、一月七日の午後一時から夜の十一時すぎまで行われる。

また、「大善寺玉垂宮」のホームページによると、鬼夜の歴史については以下のように書かれている。

鬼夜は、『吉山旧記』によれば仁徳天皇五六年(368年)一月七日、藤大臣(玉垂命)が勅命により当地を荒し、人民を苦しめていた賊徒・肥前国水上の桜桃沈輪(ゆすらちんりん)を闇夜に松明を照らして探し出し、首を討ち取り焼却したのが始まりだと言われている。毎年一月七日の夜に行う追儺の祭事で、1600年余りの伝統があり、松明六本が境内を巡る火祭りだ。平成六年(1994年)には国の重要無形民俗文化財に指定され、日本三大火祭りの一つに数えられている。

以上のことから、鬼夜についての由来と、災厄を祓い、幸いを招くという1600年余りの伝統ある歴史であることがわかる。

3. インタビュー

2023年12月29日に大善寺玉垂宮の主催者にインタビューを行った。残念ながら担当者の方が忙しかったため、インタビューができなかった。2024年1月9日もう一度玉垂宮に行ってインタビューを実施した。質問と回答は以下の通りである。

質問1. 鬼夜の開催はどのぐらい前から準備を始めますか。具体的にどんな準備しますか。

答え1. 鬼夜の準備は1月7日の祭りが終わったら、その後から来年に向けての材料の準備などを、探します。例えば、松明を作る竹を持ってきてもらうように業者をお願いするなど、早く材料を準備します。その材料がないと作れないので材料の準備がまず一番最初にすることです。

質問2. 氏子たちはなぜ半裸ですか。

答え2. 昔から続いています。服を着ていると、火を使うお祭りなので火の粉が落ちてきて服が焼けてしまって火傷をします。裸の方が火の粉が落ちてきてもスッと払ったら取れるので、もし服が燃えたら水をかけるか、服を脱がなければなりません。だから、裸のほうが安全です。

質問 3. 観覧する時に安全に観覧できるようにどのような準備をしていますか。

答え 3. 有料の観覧席を作って、人よりも高いところから松明が見えるようにしています。そこには松明が突っ込んだりしないので、そこで安全に見えるかどうかを確かめます。警備をする役職の人もいて、松明が動くところは道を開けておかないといけないので、道を開ける役職の人もいて、安全面に配慮しています。

質問 4. 氏子にはどうやってなれますか。毎年氏子の人数に変化がありますか。

答え 4. 氏子というのは、この神社の神様がこの地域を守っていて、その地域に住んでいる人がなれます。引っ越して来て地域に住む人もいれば、出ていく人もいるので、その時点で多少人数も変わります。ただ、住んでいるから氏子になれるわけではなく、別の宗教を信仰している方もいるので、無理にすすめません。

質問 5. コロナの前後で観光客の人数に影響がありましたか。今年鬼夜の観光客の人数はどのぐらいですか。

答え 5. コロナ禍の2年間は松明が作れなくて、そして、人もいなかったです。やらなければならない祭りはしたんですが、松明を作ることができなかったので、見に来る人がいませんでした。去年は博多祇園山笠が開催されたので、国のカイドラインに従いました。でも、コロナ前より見に来る人は少なかったです。例えば、動画配信サイトでライブ配信をして、見に来られない方に見られるようにしました。今年は一万人を超えていたと思います。

インタビューをする前は鬼夜の開催について理解できていなかったが、このインタビューで鬼夜の準備や氏子について知ることができた。今年の祭りが終わると、すぐ次の準備に入らなければならない。また、いろいろな材料を探して準備をしなければならず、とても大変だと思う。氏子たちがこんなに寒い日に、何時間も半裸でいる理由を知ることができた。さらに、観客への安全面への配慮が行われていることが分かった。

4. 考察および提案

「大善寺玉垂宮鬼夜」は1600年余りの歴史を持っている祭りで、重要な無形文化遺産の祭りである。コロナ禍における2年間、鬼夜の開催はとても大変で、厳しかったそうだが、今年の再開は約一万人を超えて、見に来られない人が見られるように動画配信サイトでライブ配信もした。こうした取り組みが成功していることが分かった。しかし、氏子の人数の確保は難しいと感じた。後世に伝えるために、氏子たちへの一層の支援は不可欠ではないだろうか。

5. まとめ

今回のインタビューを通じて、鬼夜の準備や氏子たちのことについて知ることができた。インタビューを実施するために2週間で三回玉垂宮に行った。おかげで、三度も違う景色が見られた。最初に行った時、鬼夜の準備を見ることができた。例えば、ある人は白い紙を縄に結んでいるのを見た。担当者の話によると、この白い紙は「しで」と言って、しめ縄に縛り付ける。神聖なもの一般的なものと分ける結界のような意味合いがあるものである。2回目は鬼夜の日、両親と一緒にいった。神社はとても賑やかで、多くの屋台があった。午後8時45分頃に6本の大松明に一齐に点火されると、炎が立ち上がった。炎が上がるにつれ私の心も体も熱くなった。その後、氏子たちは木の棒で松明を支えて掛け声を上げながら、境内を巡った。非常に迫力があつた。3回目はインタビューを実施する日だ。驚いたのは、たった一日で神社が元の姿に戻つたことだ。灰もなくきれいだった。そして、主催者の方にインタビューをしたが、緊張して、上手く日本語が話せなかつた。しかし、その方は優しく、丁寧にインタビューに答えてくれた。

今回のインタビューで、鬼夜の主催者に話を伺う貴重な経験ができ、日本の伝統的な文化が深く理解できた。同時に日本語を実践的に使う機会にもなつた。このような魅力がある久留米を代表とする祭りは多くの人に歴史的な神事や意義について知ってもらい、さらに継承して欲しい。今後、日本国内はもちろん、世界に広く発信するべきだろう。

参考文献

久留米大善寺玉垂宮 <https://tamataregu.or.jp/> (2023年12月25日閲覧)



写真1 大善寺玉垂宮参道 2023年12月29日 撮影

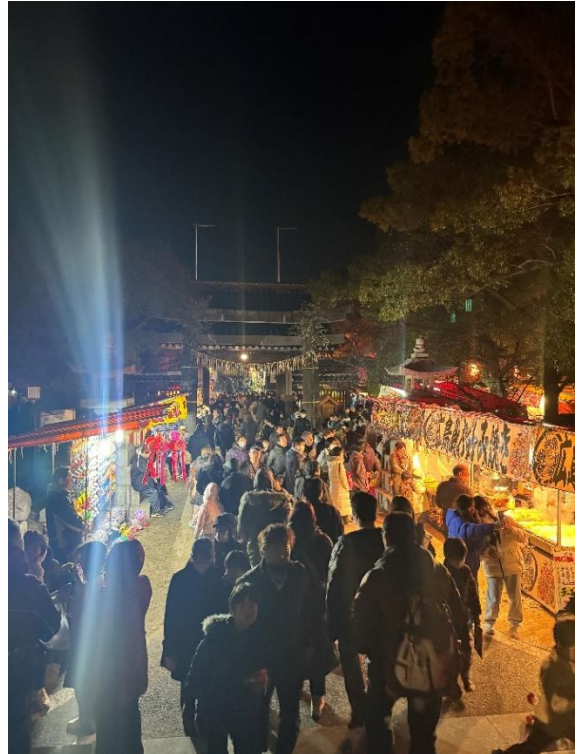


写真2 大善寺玉垂宮参道 2024年1月7日 撮影



写真3 鬼火の点火 2024年1月7日 撮影



写真4 鬼火の点火 2024年1月7日 撮影